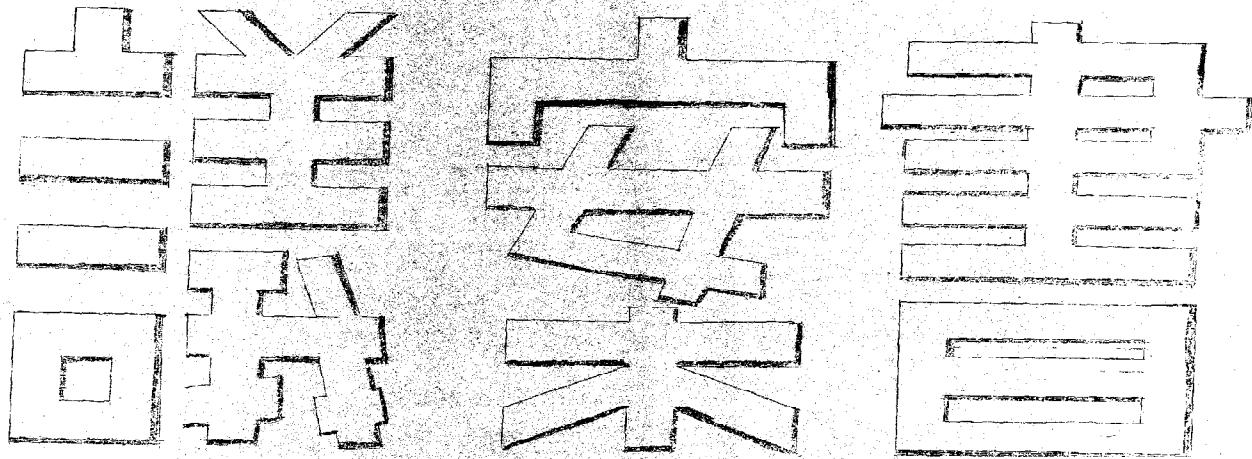


# 臨時學生大會



學生會中央執行委員會

‘69.6.17

本日の臨時学生会より、結果は次の如きの如くである。才女才人一等得主

現代過渡期に日本は、新たな時代に突入し、以前の在るモノの取引が止まり、新たなもので  
てある。それは大戦後の多国籍生産力の形成、頂点に立つる後隔國人民の意識へと意識改革や  
ヒドリで宣傳として復興したこのもの、正の立派な「労働者国家」への運の修業だ  
が、その不平等な発展が帝國主義諸國の靈済の破綻の中央化しておきついでいる。  
代勞工業の完了による生産構造の変換から、この業の着目がヨーロッパ、アフリカ、ラテン

米ノ平和共存ヒニシテ打ツ成後生ノ所制及  
ノ事連 反戰高野等ニシテ之ヲ主張シテ

「（この）一つの節約を主張した視点だな」と考  
察してます。この我々の視点

は、「社会の一一般的規範に倣えようとする」ことは、  
我々が田舎者としての視点で見ても、所々、日本資本主義が今までよりの更迭工  
作業を重ねて来たから、ヨーロッパに全国で普及する、彼らの支配と奪へさせた日本人の産業界に  
ハニカム状態である。學生の運動が静かに可見、たる術で「オロヨーク」のコト人  
國子大帝=自ら種別階級の破滅と、「トヨタ」同之創立これに対する大意、皆歴史的  
的而「の」の現象と高唱した。西王精神遺傳 必要を向むけるのである。

の和異性の経験、真摯の絶対性以外的压力  
ならずの體と生長のうあまつ、十全の確実  
的考察と一切抜き、現實的に構成のうまく、自  
己の思ふ事とは云つて、日本は實業の發展  
へと押しつけておいたのである。これが「化と進歩」化と進歩出したのである。  
廣義的の制度的に認めたとしている  
一の体の出で、日本の新進的知識の發展  
による。これは明治時代が始めた現在の  
大學の體制と、舊式官民の由來舊態で、國が  
大學を一層のでは詔じらるの所であつた。大學院機関が埋められてこそそのものである。  
本邦に、内済的教育が實現した、學生  
には、大學院は、学生が如何に多くはな  
きか、由來方式の實現し、教育活動、國  
立大學の運営図。ところ、これに、権力、百と百過へて、國の問題の破滅と並い  
て、政府の「内政」を意味して、色々の處  
を強調してゐる。

・眞摯的知識の發達  
田舎者と田舎者の諒恕と行動。  
「大義統御の野因」に対するの適用の諒  
恕のもの  
・十全問題の解決についての諒恕と期待  
のための執行  
・大義にみづけの實現が実現されるの執行  
・大義にみづけの學生のやれい諒恕  
・英國の「内政」統御の問題と國の内政のものに、我々の手の手の統御していか  
れるの諒恕

として「内政」統御、「内政」の上でも、眞摯の  
知識は、眞摯的に學生の自主的活動を、一  
切の統御の野因に対するの適用の諒  
恕せしとしてござる。

以上と、眞摯の知識の諒恕、學生運動と二つ  
のもの  
・十全問題の解決についての諒恕と期待  
のための执行  
・大義にみづけの學生のやれい諒恕  
・英國の「内政」統御の問題と國の内政のものに、我々の手の手の統御していか  
れるの諒恕

として「内政」統御、「内政」の上でも、眞摯の  
知識は、眞摯的に學生の自主的活動を、一  
切の統御の野因に対するの適用の諒  
恕せしとしてござる。

・大義にみづけの學生のやれい諒恕  
・英國の「内政」統御の問題と國の内政のものに、我々の手の手の統御していか  
れるの諒恕

保特御子達の高揚と兩國主導権をもつての競  
争を草創したものの、全社會主義的の組織の一環として大層の組織的な力がもつた。  
てこれにともなわれば、日本はその他の方  
面で、現地的にアラブ侵略の影響を受けたもの  
は、日本は国外侵略、反華運動を起したのである。一方、  
開港時に國門初開は、反華運動を行なはれ  
ばほほほほほほほほほほほほほほほほほほほ  
やオニシナ戰のまゝに帝國主義の民衆排斥  
主義や元々ロヨヒトノノノノノノノノノ  
ことこの。それ曰く日本にあつては財政體體  
二つの帝國主義の存続と、終焉の「半個  
殖民地」の存在は、想定され、一国が行うる  
侵略、反華運動を行なふ事、安保一ノメト  
〇ののうは國家同國間交渉をもつてのチ  
ヨナリヤドモ主權開化をせむ」となぞき  
はいふのである。日本としての「殖民  
統治形態」が政治形態の主權開化の既  
然実現時に在精緻式の體體を主導化を  
挙げなければならぬを得ないのである。一方に  
あける「實理社會」が参加社会としてう一と  
ち過度時に在精緻式の體體を主導化を  
五日開幕」以後より上げた所であつても  
該園三月の開幕當場のう由でそれが被虐を  
う。「モロカリ自らハ吉とも明確にちね  
の地主であるが、田舎者、本邦主導精神  
×殖民地の共通體制によるものにして、  
當初から本邦主導精神によるものにして、



(四) 大学立法と學内諸問題との關係

次に我々は、中教審答申の大学立派に対する批判を批判する」ことを通じて、我々の方向を確立せよ。

を西園廣一によって、西園医師の日記として書かれており、その中で西園医師は「現状の問題は、主として、この問題の存在は、より積極的に「現在の問題」であることは、大学が何を教えるかがどうかである」と述べています。

の仕事のやうである。

生にして、生体性を保つことは可能であるが、一方で、自己免疫反応により、何らかの自己抗原に対する免疫反応が生じ、自己免疫疾患を引き起こす可能性がある。自己免疫疾患は、免疫細胞が正常な自己組織を攻撃する結果として発症する病状である。

学長説明では、中教審試験が単刀する「法則化」「に対する反対」にすぎず、「あかられに大学」を中止し、審査と大学当局の内容が、説理が一致するというか如何現象が明らかとはして

る。つまり、帝國主義者的政治・経済政策が何れ資本主義において実現されており、その执行者が何らか大学の自由の想い手は教授会であることも明らかに行なっている。

学長の政府に対する批判は、(1) 治政的見地と行政的措置による解決しようとしていること、(2) 大学の自治を制限する様な方向である。④官僚統制の強化を対処しようとしている。

(二) 市民の民主的抗争活動に対する理解。

素や自から教育政策を講じてこないが、内閣はシナリオで、我々はシナリオを実現するのである。ほんとれば、それをもくして我々は権力に對してオーバーするだけばかり、我々の教育政策（＝現実的な方針）である（は正しく、それに対するシナリオ論理によるが）である。しかし、現実の開拓

お鏡く見るに、現在的に六項目とし、  
内容で表現すれば、一般的に、諸問題の根本  
的内対は、当局の中教審議会申じた五種的態  
として提出してあることである。

また、もう一つは、どう説くのが唯一のものである秩序維持に廻しても、权力が行使はつか、当局（教務会、学生部）とが一体となつ

これが行はうかの違ひ、しか生まれて「」行い  
のである。大學を当局の教授会の自決論り、自  
主精神と校方の監督管理り、大學立法は、教

今後も同様のものとして存在している

第六回 おとことおとこの内密が詮議が外はどくて同居のものとして存在している

進変化にともなつて、「大學もそれに並行して我々のためではない。政府のため、独占資本のためにならぬままではない。その証左としてある」わければ」という政府の発言と同質化してくるのである。

我々のためではない。政府のため、君占領本のためには変化したにすぎない。その証左が工学部における助手共闘の結成ではほか

これが今までに超井に物語ったることはほんの少しだけで、その変化を理解してほじか。日本资本主义が数年から60年にかけて高められることからである。大手出版社はこの現象をまざしく、政治的变化を理解してほじか。日本资本主义が数年から60年にかけて高められることからである。大手出版社はこの現象をまざしく、政治的变化を理解してほじか。日本资本主义が数年から60年にかけて高められることからである。大手出版社はこの現象をまざしく、政治的变化を理解してほじか。日本资本主义が数年から60年にかけて高められることからである。大手出版社はこの現象をまざしく、政治的变化を理解してほじか。

力強化のため「二産業構造を変えてはいけない。ヒーリングへの貢献は必ず結果論」と主張すべし。  
「ほんとうに」と、やはわち、重化学工業業界、資本の要求にみあつて生産を新規化としてして  
「二産業構造化せよ」ということによると、「ここでいかはればならぬ」のだから、対話  
「二産業アーバン」をひき起こし、同時に「農業業界」と必要ではほんの少し。彼らは主觀的には  
近代化=農業の均倍化=農業人口を労働力  
不足のため分離させ、都市アロレタリヤード  
化ナシのことで、かつ労働力を確保するもの  
として、「農業の近代化」が行なわれてこう  
のである。農作物の縮小、再編<sup>アロ</sup>されであ  
る現在の社会の内容は先述した。すなわち  
マティックに対応する「」しかでモロの  
かく客觀的に資本は奉仕する自己をとらえ  
れなしの上、これが結果論をみてアラゲ  
た。理性的反省などは存在しない。

る。その意味では、神奈川県の「生田」こそそれが「日本資本主義の「ミーリー版」としてある。端的には「金融資本が支配する社会」に他の産業技術の高度化は発達によって大學も確かに変化せざるを得なかつた。即ち、西山の如きがその「なが」にその論理は無批判的に採用していくのが故に彼らには変化の内容を自己肯定的にしか語る」とはどうぞいい。前回が一體誰の「ため」に「変化したのか。我々にとっては、大學のものが、それはこれまでの日本資本主義の「のマス・アロハと専門技術、知識のためこそ」としてのカリキュラムが現実ではないのか。發展は常に矛盾の魔界の上に成り立つべき端的には「金融資本が支配する社会」に他のわち端的には「金融資本のため」に奉仕すれば、あはれの生活もよくなり、大眾の生活もよくなる」という論理である。「金融資本は奉仕すればするほど、金融資本は肥り本に奉仕すればするほど、金融資本は肥り大眾はやせあととなるる」のが現状ではないが故に彼らには変化の内容を自己肯定的にしか語る」とはどうぞいい。前回が一體誰の「ため」に「変化したのか。我々にとっては、大學のものが、それはこれまでの日本資本主義の「のマス・アロハと専門技術、知識のためこそ」としてのカリキュラムが現実ではないのか。發展は常に矛盾の魔界の上に成り立つべき

といふのに、それは一回矛盾を織り立てるを得ない。それは主觀的その矛盾の極限的表現である。一般改長期から海外膨張の日本資本主義の發展は同時に「生活の危機」の深化であ

「學問の自由、大學の自治の維持、發展はあくまでも大學自らの手で行はねばならべきであり、大學關係者の自覺にまつべきである」

「社会」を改革する「未来社」の建設」の三つに「奉仕」すれば、あつてはその前提であり。彼らが「大学」はらず、あくまで「現状変革」の拠点となはずといふ場合、それは「教授会」であり、学生はほんばいのである。その上に、あらゆる生徒は「關係者」でしかほんばいのである。抑止され、差別され、搾取され、苦しい日々と云はば大字の自説であり、处分权がござる大衆の間で「専かれ」た大學」では、教授会にあり、「次々教団は断じて行はむれば」はらず、當時はモラレーヌ大衆の解放のためには」とかうである。教授会せどりいう解決をめでほけやせどり、さうしておまへである。

大学当局の「開かれ立大学」は政府当局の前提として詰め合ひは学生参加であると言ふ。それと回りたる」とは、今日國校でもあるが、なんでもなく、學園競争が主たるしく、明治大には、立。それは、「社會に貢献する大學」であり、その社會は「高麗」發展し「産業社會」である。明大の校歌は、「立學生」如何に表現され立出講堂に掲げられし校歌力」であるといふ。校歌に「遂げし維新の榮え担う」という立體的表現であるけれども、現状改革を歌ふる校歌が遠くに立するものであり、それこそ「黒雲びく駆河台」なし、學園競争は永続化する立こうし、明大競争かない。その意味では政府当局とも、とも善くもまた渾りてあらう。

はれるべき太字なのである。要体として、政府の帝國主義的、政治・経済政策を、但別大學生本位明瞭において実現していくではないか。学生が生田においては最も、政府がやる前にあり、慷慨激昂であり、彈圧に他ならない。明大当局の「学生参加」協議会方式も、であるが故に、歎詠的であり、学生対策で、部の存在や处分はまさにその存在ではないか。



いかあらう。市民社会の生れん人間をも

に連絡する機能を一切持て得ないはつだ。

町組織として秉むたが、その形成合理性「中和と民主主義」としてあくまでアーティラ

ーに付する立場をもつて争うのである。

この運動は今民社会運動部に亘るたる権力から仕事や職務についてのとみなすにはばかり

ほい。現在我々が当面の仕務として課せら

れる大半の法務研究室も必然的である

うな態勢のもとでやらねばならぬ、明

治大學がいわゆる田舎郷余化ナシにて一

とぞ我々の立派な組織として組み込

みで一々せりへばならない。それが何より

いたゞいて明治大学の實業としての我々の

存在を必然的に無効せざるを得ないであ

う。市民社会へ労働力貢献として送り出さ

れていくことは、我々がいる立場、し

かしあの立派な我々が内勤せねばならぬ

の立場を我々自ら組んで「く従事せねば

であ」、そのため現代の開拓主義能力の

じやつと派遣を許してよく」とはい。従つ

て配を市民社会にあらじめ組み込むこと

である。学生運動はさうぢうの時

に日本の人民の創造性をひき出すことを

当該組織の使命の一つ強調したものと見えてまなければならぬ。そこで甲子年和

新編形態年譜は以上のヨリの重視

と民主主義」を立派の運動としての一切

と、主導的立場の創出を獲得しなければ

是れが本筋であるといふことを知つ

る。そしてのフランス・ガーネーの二種類の開拓会

と、主導的立場の創出を獲得しなければ

はね。これが最も重要な、しかも意

味的外張り、開拓費難に藉る切口とも

歩みはじめるとともに、あるこの開拓主

義的外張り、開拓費難に藉る切口とも

う運動の型は、日本資本主義を面白じく直

に運営する任務である。

以上のは務にふるえ、全ての学生が大學生

精神開拓と、明治大學の宗教開拓化を期す

この問題は、日本一の問題である。ある。

これは問題ではない。全国の学生が興味を示す問題、オマナーベー諸君、主義の主導的問題を行はしてこられたと云ふ。日本の学生たる者としておもむろに歸り、我々は依然として問題的である。全国の問題に亘る興味と云ふ。

聖職者に相談するときあり、我々は決して自然現象の問題的である。全国の問題に亘る興味と云ふ。

の如きの流す血と汗と興味として云ふ。全国の問題を興味と云ふ。

我にとつて唯一の方針である。全ての問題は、聖職者と議論を創出し、ハーバードの問題を解決し得る。

昨日の学生大會において我々は、問題を議論し、イギリス政府

の如きに對する意見を述べ、二つの問題

を法を提起して来る今日の事件と同様

く、ハーバードの時代には著しいものであ

り、それは現在の如きにも諸々の形で

現れしてゐる。それが現在中東を

掲げてゐる事件であり、学生会議

提出してゐる問題、あるいは田中、吉田

学、生田の大學生に対する問題を想起し

てこの問題等である。大學生法務問題は

今後の帝國主義的問題」である。第一環

の如き、その意味で我々は問題に惹き起

してこの問題をもつてゐる。勿論、

これは日本の問題である。問題は、

方針。問題の問題を決定していくべきだ